

世界に羽ばたく小さな日本人レスラー

- みちのくプロレス -

1994 年 4 月 16 日、両国国技館で団体の垣根を越えた「Super J-cup 1st.Stage」において一躍脚光を浴びたみちのくプロレス。その後、新日マット「Best of the Super Jr.」にスペル・デルフィンと TAKA みちのくがシリーズ参戦し、デルフィンは優勝決定戦で獣神サンダー・ライガーと対戦するまで勝ち上がり「みちのくプロレス、ここにあり」を満天下に知らしめた。1996 年 1 月 4 日の東京ドーム大会でサスケはライガーを破り IWGP ジュニア王座を獲得、同年 8 月にはトーナメントを制しジュニア 8 冠王座を手にし、地方のインディー団体みちのくプロレスは経済的にも体力をつけることに成功した。その団体力を背景に、レトロな 6 人タッグでオールド・ファンを喜ばせ、当時みちのくマットの最前線の激しい闘い「みちのく正規軍 VS 海援隊★DX」で観客を熱狂させた。

① 1996 年 10 月 10 日 東京・両国国技館

ザ・グレート・サスケ／初代タイガー・マスク／ミル・マスカラス

VS ダイナマイト・キッド／小林邦昭／ドス・カラス



新日の G1 クライマックスで 8 冠王者となったサスケはメキシコのスーパー・ヒーローミル・マスカラスと日本ジュニア界の立役者・初代タイガー・マスク（佐山聡：以下佐山タイガー）をパートナーに指名。対する相手チームはマスカラスの弟ドス・カラスを筆頭に佐山タイガーと宿敵であったダイナマイト・キッドと小林邦昭で編成した。どの顔合わせをとっても懐かしかったり、初顔合わせだったり興味深いタッグ・マッチである。

まずは佐山タイガーとダイナマイト・キッドの顔合わせでスタート。1981～83 年の新日マットを沸かせた懐かしい対戦。佐山タイガーはぼっちゃりし、キッドは長年にわたる肉体酷使の後遺症で筋肉が落ちてしまっているが、長くプロレスを観戦し続けているファンにしてみれば感動の場面の連続である。代わったサスケも小林相手にラ・ケブラーダで見せ場をつくる。次いでマスカラス・ブラザーズの対決。本場メキシコでも 1 度しか対戦していない兄弟対決が日本において 2 度目の対戦だ。ファンからすると感涙ものの対戦、



腕の取り合いからマスカラスがドスをロープにとばしてカウンターのフライング・クロス・チョップを見せる。威力はさておき、国技館に集まった観客が拍手喝采となる。

この後、サスケがキッド・ドス・小林につかまって集中攻撃を浴びる。サスケは 8 冠王座を獲得した試合で頭蓋骨骨折の重傷を負っていたため、ちょっとした攻撃でも身体の芯まで衝撃が



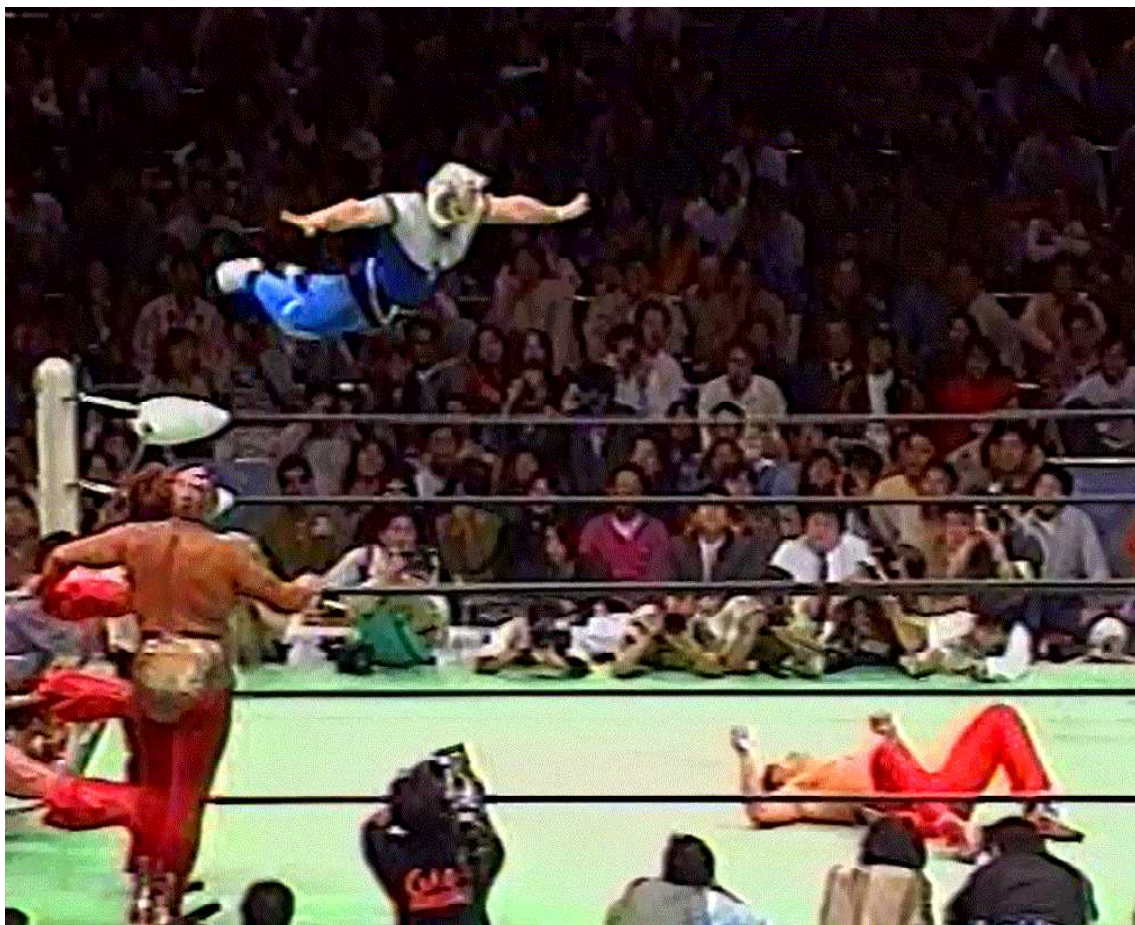
響く状態であった。サスケが何とか自コーナーに戻ると佐山タイガーがリング・イン。佐山タイガーと小林も新日マットで死闘を繰り広げた顔合わせ。佐山タイガーはこの試合に照準をあわせ（これでも）身体を絞ってきている。動きはシャープで、小林が蹴りで威嚇すると、これに対してソバットで反撃。蹴り足が小林のガードの隙を突いて腹部に突き刺さる。その後、両者は意地を張り合い、かつての新日マットで見せていたような攻防を再現して観客を魅了する。レスラーの背景に映る観客の笑顔が心底



この試合を楽しんでいるのがわかる。またしてもサスケが捕まると、マスカラスが奮起する。ドスと小林を回転した勢いで投げ飛ばす。ベテランの妙技はどのような試合展開であ



ってもキラリと光る。老齡ではあるがマスカラスはサスケの不調を挽回するために発憤しているようだ。代わった佐山タイガーもキッドにソバットからのハイ・キック、回転キックからフロント・ネック・チャンスリー・ドロップへ。体調が芳しくないキッドはこの技を受けきることができず、DDT の要領で頭からマットに刺さる。だがまたしてもサスケがつかまり、場外へのダイブ技の連続



の後、佐山タイガーと小林の攻防へ。エグ
いツームストン・パイル・ドライバーでダ
ウンさせた佐山タイガーはコーナー最上段
からダイビング・ヘッド・バット。体型に
似合わず動きが素早く軽い。次いでマス
カラスが小林・ドスに連続で頭から当た
っていくフライング・クロス・
チョップ、だが連携に失敗

して味方のサスケにダイビング・
ボディ・アタックを誤爆。そこを
キッドが逃さずブラック・タイ
ガー式のツームストン。さらにド
スが滞空時間長めのライガー・
ボムでピン・フォール。頭蓋骨
骨折が完治していないサスケに
とっては悪夢の拷問フィニッシュ
であった。試合後は清々しいノー
・サイド。



② 1996 年 10 月 10 日 東京・両国国技館

グラン浜田／スペル・デルフィン／タイガー・マスク／愚乱・浪花／薬師寺正人

VS ディック東郷／MEN'S テイオー／獅龍／TAKA みちのく／船木勝一

新日マットに上がり全国的知名度を浸透させた人気者デルフィンの観客を楽しませるファイトに異論を唱えたみちのくルード集団の海援隊★DX。かつてデルフィン軍団の一員であった TAKA もルードに転じてデルフィンを窮地に追い込んでいく。海援隊★DXはデルフィンのファイトに付き合わず、徹底的な攻勢をみせる。

現在 (2019)、新日マットを主戦場に行っているタイガー・マスク (4 代目：当時はデビューして 1 年超) と TAKA が鎧を

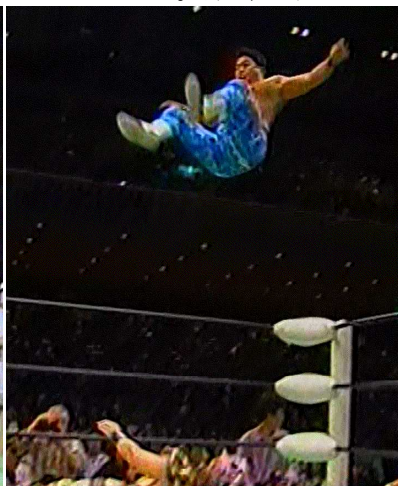
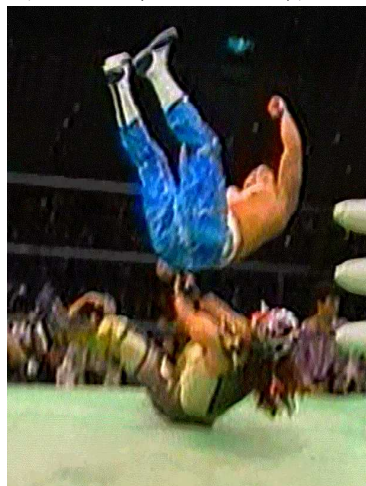


削っている場面が興味深い。試合は長丁場となるが、激しくスピーディーな展開なので退屈することはない。



正規軍 (正確にはみちのく正規軍+デルフィン軍連合)・ルード軍とも、そして個々がそれぞれの持ち味を発揮しているのでスリリングな展開がこれでもかっ、これでもかっとならみ掛けている。デルフィンが海援隊★DXのリーダー・ディック東郷をデルフィン・スペシャル (スープレックス技) にとらえようとバックにまわると、レフリーのブ

ラインドを突いた東郷は急所攻撃で難を脱し、投げっぱなしパワー・ボムでデルフィンをダウンさせ、コーナー最上段へ上る。必殺のダイビング・セントーンだ。東郷のウェート



は 100 kg 超。この落差で衝撃は体重の数倍に跳ね上がる。ズルくても、卑怯な戦法でも “勝ち” というのが海援隊★DX のポリシー。説得力抜群のフィニッシュで、東郷は人気者デルフィンを虐めきった。正規軍が混成軍だったのに対し、みちのくマット活性化のために立ち上がった海援隊★DX は熱いイデオロギーで結ばれた悪の連携で闘いを凌ぎきった。このような闘いがみちのくで 1 年間続く。

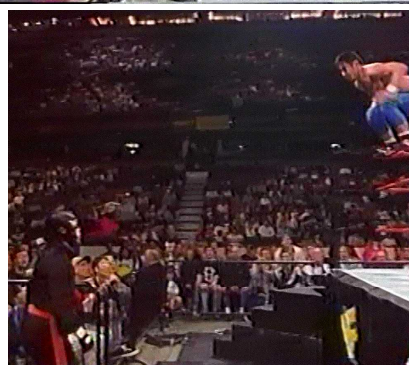
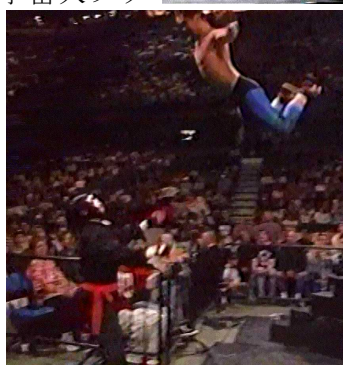
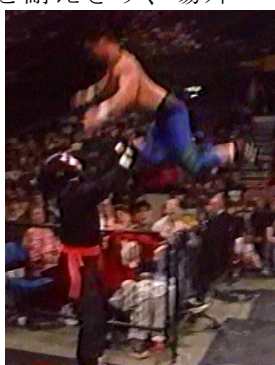
③ 1997 年 7 月 6 日 PPV 「In Your House 16: Canadian Stampede」

④カナダ・アルバータ州カルガリー サドル・ドーム
ザ・グレート・サスケ VS TAKAみちのく

『軽量級のエキシビジョン・マッチ』と銘打って、日本ジュニア界で台頭してきたみちのくプロレスの 2 選手が WWF の PPV で対戦した。日本で盛り上がっているジュニア戦士たちの闘いをアメリカ・カナダの観客に知ってもらおうという意図の試合である。ビンス・マクマホンははじめ、ザ・グレート・サスケと契約を結ぼうと考えていたらしく、サスケの紹介プロモーションでこの試合を組んだらしい。ビンス・マクマホンをはじめとする WWF の首脳陣は、黒ずくめのサスケがキック主体の打撃で試合を進めたことで、どうもサスケに「ヒール」の印象を抱いたようで、そのファイト・スタイルがアメリカ向きではないという評価に至ったらしい。観客もサスケの TAKA に対する容赦無い攻撃に反応は鈍く、TAKA が反撃すると声援をあげている。カナダ（+アメリカ）の観客も両者の闘い模様から、TAKA みちのくを応援する対象と認知したようだ。

サスケの執拗な蹴撃は、日本における海援隊★DXとの抗争で、悪の連携で苦戦を強いられている鬱憤を晴らすためのものであるが、カナダ（+アメリカ）の観客と WWF 関係者たちはそのような事情を知らない。そのため「アイツ、相手に怪我をさせるんじゃないか？」という危険なイメージを受け付けてしまったらしい。

それに引き換え、サスケの厳しい撃を耐えきり、場外への宇宙人プラ



攻

ンチャなどで見せ場をつくった TAKA みちのくへの WWF 首脳陣の評価は高く、観客も TAKA が持つ潜在能力とその可能性に期待を抱く好意的な声援が多くなっていく。サスケのジャーマンを回転着地し、ウラカン・ラナで丸め込んだ時は TAKA 勝利を観客が望んでいたような盛り上がりであった。この声援に推され、TAKA は徐々に本来の持ち味を発揮してサスケをジワリジワリと追い詰めていく。返されたものの説得力充分のフィニッシュ・ホールドのみちのくドライバーⅡ。米マット進出の執念でサスケがキック・アウト。



TAKA のミサイル・キックを下からの突き上げドロップ・キックで迎撃したサスケは叩



き付け式サンダーファイヤー・パワー・ボムからのオースイ・スープレックス（タイガー・マスク・スープレックス）で粘る TAKA をねじ伏せた。

サスケは WWF からオファーを受け、その PPV で見事勝利を挙げたことで WWF との契約を勝ち取



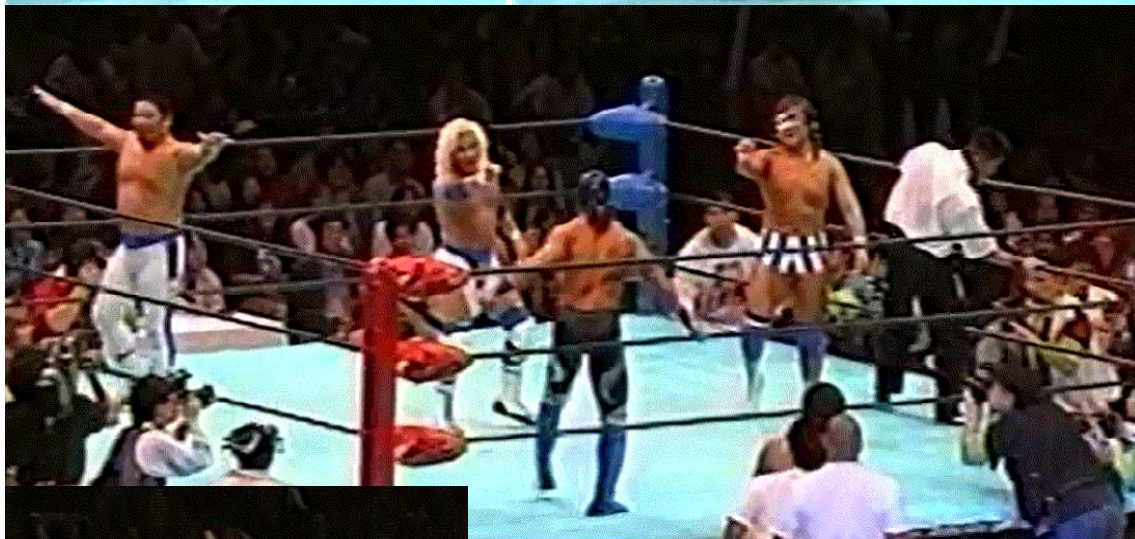
ったと考えていたらしいが、皮肉にもビンスが契約をする相手として選んだのは敗者となった TAKA みちのくであった。これが日本のみちのくマットでの遺恨マッチに繋がっていく。

④ 1997 年 10 月 10 日 東京・両国国技館

スペル・デルフィン／星川尚浩／薬師寺正人

VS ディック東郷／MEN'S テイオー／船木勝一

一年前（正確にはそれ以前）から、みちのくプロレスの「楽しいプロレス担当」だったデルフィンが、シリアスな闘いを志向する海援隊★DXによって目の敵にされてきた。来る日も来る日も、どんな小さな地方会場でもデルフィンが標的にされ、遂に 97 年 6 月 22 日の福島・サンシャイン浪江大会におけるシングル・マッチ（デルフィン VS 東郷）で徹底的に痛め付けられたデルフィンが「屈辱の股くぐり」を観客の前で晒し、以後消息不明になってしまう。デルフィンは失踪期間中、肉体改造と必殺技の開発をしていた。この両国大会に、デルフィンはこれまでの鬱憤をすべて晴らすという覚悟で臨んでいた。



デルフィン失踪中に最前線で闘った正規軍若手の星川・薬師寺は海援隊の攻撃を試合前半のほとんどで受けきる。何としても早くデルフィンを集中攻撃したい海援隊は星川、次いで薬師寺を場外葬（東郷の投げっぱなしジャーマン→テイオーの急角度バック・ドロップ）とし、残ったデルフィンを精神的に追い込む。だがデルフィンは挫けず反撃、さらに星川・薬師寺もデルフィンを好フォローする。デルフィンも憎き東郷へ得意技スイング式 DDT を 3 連発、続いて薬師寺・星川が連携で東郷にダメージを蓄積させ、最後は新必殺技・大阪臨海アッパーでピン。

⑤ 1997 年 10 月 10 日 東京・両国国技館
ザ・グレート・サスケ VS TAKAみちのく

カナダでの WWF・PPV の再戦。自分が WWF との契約を勝ち取ったと思っていたサスケが、現実には契約を獲得した TAKA に毒舌で怒り（怨み）をぶつける。TAKA の WWF 円満移籍は決定しており、煽りプロモーションも WWF 全面協力のもとで作成されている（金も相当かかっている）。

試合はサスケが初っ端からエンジン全開、TAKA はのらりくらりとサスケの闘争心を



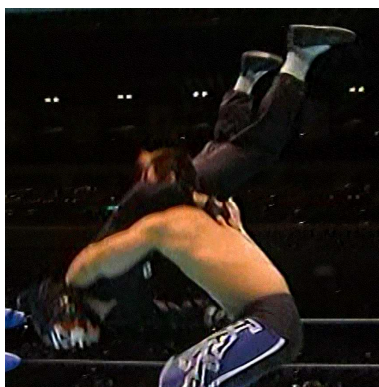
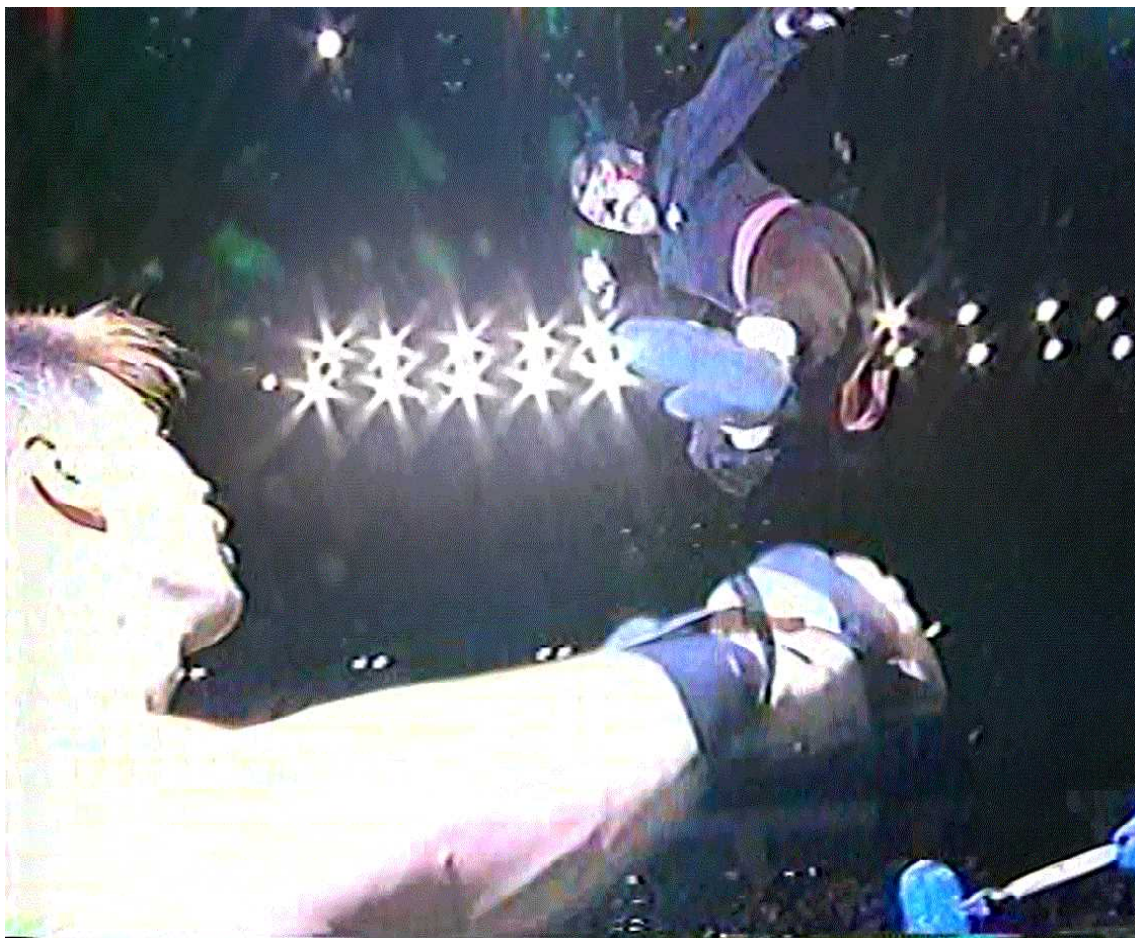
方が上位なのだ。それが TAKA のちょっとした仕草にも現れている。意外ながらもグラウンドの攻防が続く。もしかすると長期間みちのくマット（日本マット界）を去る TAKA との別れをサスケが惜しんでいるのかも知れないという錯覚に陥る。スタンディングの展開になると、サスケが一心に TAKA を蹴り続ける。TAKA も逃げずにサスケが繰り出す多くの蹴りを受けている。

「もうサスケと闘えないかも知れない」という惜別の念からの行動ととれなくもない。状況は変わってもみちのくプロレスという団体では師弟の間柄だった 2 人の、一風変わった「別れ」の挨拶だったのだと考えるのが正解であろう。サスケは急角度の片エビ固め固めで TAKA を苦しめ、TAKA は足四の字固めで 2 本の靱帯が切れているサスケの動きを封じ込める。サスケが場外の TAKA に対してラ・ケブラーダ、次いでコーナー・ポスト最上段からのライダーキックと果敢に空中殺法で攻め立てる（当たりは不充分）。

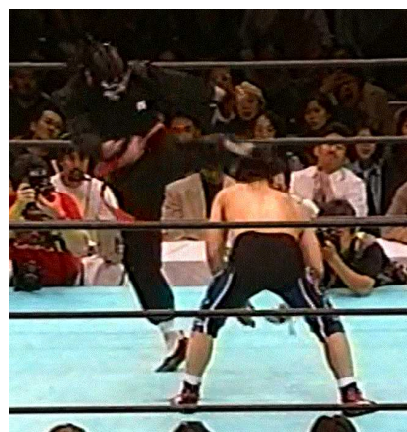


受け流す。サスケがグラウンドながらも感情が溢れんばかりの厳しい攻めをみせるが、TAKA はこれを冷静に対処。次第に地味で落ち着いた展開になっていく。解説でサスケが過去の TAKA について語っているが、どうしても「TAKA みちのくは格下」という意識で話をしている。しかしリング上で闘っている TAKA は「WWF のスーパー・スター」の自信と自覚を以てサスケを見下している。WWF マットにおいて TAKA の





サスケがスパートをかけ、サンダーファイヤー・パワー・ボムでTAKAを叩き付け、ウルトラ・ウラカン・ラナで決めようとするが、カウンターのパワー・ボムで返され、ミサイル・キックから厳



しい角度のみちのくドライバーⅡ。カメラが追い切れていないが、サスケの顔の向きからエグい角度でマットに刺さったものと推測できる（額から落とされたとサスケが語っている）。

終盤、突進してきた TAKA をカウンターのハイ・キック、次いで縦回転の浴びせ蹴り、感情剥き出しの殴り合いから立ち上がりざまの前頭部を掠めるハイ・キック、さらに喉元から右頬を挟むようなハイ・キックと執拗に蹴りまくるサスケ。棒立ちになった TAKA のバックにまわり、足腰が辛い状態であるサスケが勢いのあるジャーマン・スープレックスでフィニッシュ。



敗北した TAKA みちのくがサスケを睨み付け、最後にマイクを握ってこう語る。「サ

スケえ、一つだけ言っとく。オレは、何処に行っても、TAKA みちのくの名は捨てねえ。

（観客の響めきと拍手）サスケえ、・・・みちのく潰すなよっ。」この言葉に観客は更に響めきと拍手を送る。サスケは俯いて、感極まっているようだ。TAKA みちのくは粹な捨て台詞でみちのくプロレスを去って行った。

アメリカの WWF マットを主戦場にした TAKA みちのくは、復活した WWF 世界ライト・ヘビー級王座のトーナメントに優勝し、見事初代王座に輝いた。因みに海援隊★DXの面々も TAKA を追って WWF マットに参戦、最初こそ対立関係というストーリー・ラインに乗せられたが、間もなく結託。ディック東郷らは離脱するも、TAKA と船木勝一はしばらくの間 WWF でサーキットを続けた。TAKA の WWF 離脱後、船木勝一は「ショー船木」として WWF のコーチ的役割を果たすことになる。

